HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	宮本百合子『道標』と三浦綾子『銃口』 ― タイトル「銃口」をめぐる一考察 ―
著者	林，香苗；HAYASHI，Kanae
引用	年報新人文学(21)：112-158
発行日	2024-12-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

［論文］

宮本百合子『道標』と三浦綾子『銃口』

――タイトル「銃口」をめぐる一考察――

林　香苗

序、タイトル「銃口」をめぐる二つの対談

三浦綾子（一九二二―一九九九、以下綾子）「最後の小説」(1) にして「遺言」(2) とも言われる『銃口』は、小学館の月刊誌「本の窓」に、一九九〇年一月号から一九九三年八月号まで三年八カ月、計三七回に渡り連載され、翌一九九四年三月一〇日に上巻と下巻が単行本として同社から刊行された。原稿用紙一一一〇枚、デビュー作『氷点』（一九六五）の長さを超える長編 (3) である。昭和も暮れなずもうとしていた一九八八年九月に、同誌編集長の眞杉章から「昭和を背景に神と人間を書いて欲しい」(4)、と新

連載のテーマが提示される。綾子は故郷旭川と、初任地の炭坑街歌志内（小説では幌志内）、そして満州を舞台に据え、大正天皇の御大葬から昭和天皇の御大葬までを背景に、北海道綴方教育連盟事件に巻き込まれていく主人公北森竜太の半生を描いた。

この小説の特色の一つに、「銃口」というタイトルが挙げられる。連載終了直後の対談(5)で、文芸評論家の黒古一夫は逸早く、「『銃口』というタイトルが、ぼくは非常におもしろいと思った」、「戦争の時代の象徴ということでも十分にいいのですが、その銃口が誰によって誰に向けられているのか、三浦さんの深い思いがこめられたタイトルだ」と述べる。すると綾子は、「昭和を三浦さんの立場から総括してほしい」と連載を依頼され、「昭和といえば戦争」、「戦場で火を噴く銃口もあるけれども」「あなたにも私にも、銃口がいろんなところから向けられている」、「目に見えてくる形もあるし、見えない形もある。敵も味方もわからない、気味の悪さ」と答える。続いて眞杉も、「それまでたくさん書いてこられた作品の中で、このタイトルだけが硬質」、「例えば野間宏が『銃口』といったって、ぼくは別に驚かない。三浦綾子さんがこの昭和という時代を書く小説に、『銃口』というタイトルをつけた。しかも、きっぱりと。これはすごいぞ、とまず思いました」と、やはりタイトルを告げられた時に抱いた強い印象について言及する。

一方、その翌年の対談(6)で、教育運動家の碓田のぼるは、「銃口」連載中である一九九二年刊、小林多喜二の母を描いた小説『母』と比較し、「作品の表題としては非常に対照的で、三浦さんの作品の中でも『銃口』というような表題は、あまりない」、「この作品を読むと、三浦さんが、長い時間、『銃口』という言葉にこだわっていらっしゃったという気がする」と述べる。すると綾子は、先の対談や単行本の「あ

とがき」では述べていなかった次の言及をする。「宮本百合子の小説に出てきますね、『銃口』が。何でしたっけ？」。これに対し碓田が、「三浦さんが書かれていますよね、『十二年の手紙』を読まれた感想に。『あの軍国主義時代、天皇を神とする時代にあって、天皇制反対、侵略戦争反対をとなえることが、どれだけの勇気を要するか、言ってみれば銃口の前に飛び出すにひとしいことであった』と。」と答える。つまり、碓田は、綾子がかつて、宮本顕治・百合子の書簡集『十二年の手紙』の読後感(7)で、喩えとして「銃口」を使ったことを述べたわけだが、綾子はさらに、「それだけじゃないんです。百合子の小説の中に『銃口だけが長い間、光って土の中に埋もれていた』というような感じの文章が何回か繰り返し出てくるんです。それを読んだとき、非常に心ひかれたんですね」と述べる。

この「百合子の小説」とは、宮本百合子（一八九九―一九五一、以下百合子）最後の小説『道標』を指し、この点に佐藤将寛(8)や上出恵子(9)も着眼するものの、「銃口」が、『道標』と『銃口』両作品のどの場面でどのように描かれているか、という詳しい考察は為されていない。つまり、管見の限り、先行研究において、三浦綾子『銃口』のタイトルが宮本百合子の『道標』に由来する説明はあったが、宮本百合子と三浦綾子との接点については考察されていなかった。

そこで、本稿では「銃口」というタイトルに着目し、その由来とされている小説『道標』の作者宮本百合子を綾子が知るいきさつ、及び受けた影響を検証する。ついで、『道標』と『銃口』両作品における「銃口」の描写を分析する。

一、前川正から渡された『きけわだつみのこえ』と『十二年の手紙』

本章では、綾子が百合子を真に[10]知るに至った経緯を確認する。主な典拠を「三浦綾子 年譜」[11]、「自作年譜」[12]及び、自伝小説『道ありき』[13]、前川正と堀田（旧姓）綾子の往復書簡集『生命に刻まれし愛のかたみ』[14]、『わが青春に出会った本』[15]とし、時系列に沿い初出順に次に挙げる。なお、年齢は満年齢で統一し、傍線は筆者が施した。以下同。

・一九四五（昭和二〇）年、綾子二三歳。

八月一五日。玉音放送を聴き、奉安殿にひれ伏し泣く。日本、無条件降伏。九月、生徒たちに墨塗り（教科書の軍国主義的部分の削除）をさせる。

・一九四六（昭和二一）年、綾子二四歳。

三月、敗戦までの国家の欺瞞、教育の過ちに気付き、七年間務めた教職を辞す。不信と虚無の荒廃した生活が始まる。四月一三日、昏倒。六月、肺結核にて療養所に入る。一三年間に及ぶ療養生活が始まる。

日本の勝利を信じて疑わず、全身全霊を捧げ軍国主義教育を行っていた綾子が敗戦で抱いた屈辱感、

自責の念は大きく、翌年結核に倒れるが、もはや悲しみも絶望もなかった。

・一九四八（昭和二三）年、綾子二六歳、前川二八歳。

一二月二七日、幼なじみで二歳年上のクリスチャン、肺結核で休学中の北海道大学医学部生前川正と、互いに結核患者の会の会員として一七年ぶりに再会する。一二月二八日、同日付前川正からの葉書を受け取る。延べ、千余通に及ぶ書簡の往復が始まる。だが、前川からの葉書に対し、「たいくつな人」という印象しかなかった。

・一九四九（昭和二四）年、綾子二七歳、前川二九歳。

療養所での療養態度に注意を促す前川に、「だからわたし、クリスチャンって大きらいなのよ。何よ君子ぶって……」などと悪態をつく。一方、自分の命があと何年ももたないことを知っていた前川は、その命を綾子に注ごうとする。四月、退院するが、依然として生きる喜びを見出せない。六月初旬、オホーツク海沿岸の斜里町に住む婚約者に婚約の解消を伝えに行き、その夜入水自殺を図る。六月下旬、前川は綾子を旭川市の春光台に誘い、綾子を救えない自身の無力さ、信仰心の薄さを嘆き、自らの足を石で打ちつける。その姿に心打たれた綾子は、「前川正の、わたしへの愛だけは、信じなければならない」と思い、酒も煙草もやめる。前川の勧めで英語を学び歌を詠み、聖書を読み、教会に通い始めるが、「クリスチャンの祈る祈りにも、（略）疑いを持」つ。一〇月二〇日、『きけわだつみのこえ』が刊行される。一〇月二六日、前川はその扉に、「かつての自分たちの声を聞こう[16]」と記し綾子に

贈る。一一月一八日、前川は、綾子宛書簡でその読後感四枚の宿題を課す。一一月二一日、綾子もすぐに返事を送る（以下、『生命に刻まれし愛のかたみ』『わが青春に出会った本』本文の要約）。私はこの声を聴いたと言えるか（略）これは生命全体で読むべきものだ。戦争を徹底的に批判し、否定すべきものを持たせてくれるものは何か。学徒の中にはクリスチャンがいたが、私のほしい神を感じさせなかった。〝神国日本〟の言葉は、耳にたこのできるほど聞きはした。しかし〝生命〟については、一つも触れてはいなかった。学徒の声が、決して日本のみにある声には思えなくなった。私は世界の若い魂の死際の声を聴く。偽わらねばならぬ言葉、本当の事を言いたい言葉がはっきりとわかれてある。一一月二二日、前川は、「『きけわだつみのこえ』読後感、綾ちゃんがこんなにも神を求めているのかと思うと、本当に私は心から嬉しく―うれし泪を流しながら読みました。満点を差し上げます。本当に一晩中嬉しくて、泪を一晩中床の中で流し、感謝の祈りを捧げたと申したら、偽りになるでしょうか？　私の心を本当にわかって頂けるか―この私の喜びを……11・23朝」と返信する。

ここで、『きけわだつみのこえ』が刊行されたわずか六日後に、前川がそれを綾子に渡した点に着目したい。また、前川が綾子に与えた使命も、扉の言葉に確認することができよう。前川は、「わだつみ」は「かつての自分たち」なのだと伝えた。そして、わだつみには、発したい「声」があるはずで、それを「きけ（聞こう）」と綾子の心に風穴を開けた。つまり、前川は「声を聴こうとする意志」を、綾子に授けたのである。とはいえ、この時点での綾子は、まだキリスト教の神を信じ切ってはいない。だが、自問自答しながらも綾子の中に、「戦争を徹底的に批判し、否定すべきものを持たせてくれるもの」への希求と、「世界」と

いう視点が生まれ始める。また、この綾子からの書簡を受け取った翌日に、前川がすぐさま返信を送り、しかも翌朝まで筆をしたためていた姿が浮かび上がってくる。

なお、土屋文明を敬愛し、アララギ誌に投稿をつづけていた前川は、この年に次のような歌も詠んでいる。この作品への思いの深さを、改めて確認できる。

夜更けて「きけわだつみのこえ」を読む母なりみれば泪ぐみゐつ[17]　（前川正）

・一九五〇（昭和二五）年、綾子二八歳、前川三〇歳。

前川は五月二七日付の日記に、宮本顕治・百合子の往復書簡（「世界評論」誌掲載）の感想を、「百合子の顕治あての手紙は、深い信頼と依存が美しい響きで語りかけている」、「〝離れ住む〟という点では私達と似ているが、その内容の高さの点ではどうであろうか？」と記し、自身と綾子の姿に重ねる。六月、自分の体を大事にするようになった綾子は、前川と共に北海道大学医学部附属病院にて受診。同書簡集が『十二年の手紙』として筑摩書房より刊行される。秋、三七度四分の熱が続き体が次第に痩せていくが、神経質による発熱、と決めつける医師と現代の科学に不信感を抱く。一〇月、前川は『十二年の手紙』を綾子へ贈る[18]。これを機に、綾子は百合子の作品を真剣に読み始める。一二月、『道標』連載終了（「展望」誌に一九四七年一〇月から）。綾子は初めて、作家（百合子）に手紙を書き、その感動を綴る[19]。

前川との親しさが増したこの年の五月に、綾子は恋愛に関する歌を詠んでいる。

導かれつつ叱られつつ来し二年何時しか深く愛して居りぬ[20]　（堀田綾子）

また、前川の影響で、平和という問題も切実に考え始めた中で『十二年の手紙』を読み進め、宮本百合子という人物とその生き様を、ここで綾子は真に知ることとなる。一方、前川も、一対の男女の在り方の理想として顕治と百合子を捉えていることが、その日記に表れている。

・一九五一（昭和二六）年、綾子二九歳、前川三一歳。

一月二一日、百合子急逝。ラジオで聞き、綾子思わず泣く[21]。二月二七日、前川は『十二年の手紙 その一』を綾子に贈る[22]。その扉に「私達も」と綾子が記し、二人は拇印を捺す。四月三〇日、前川は『十二年の手紙 その二』を贈る。扉には同じく二人が拇印を捺し、前川が「勉強！勉強！」と記す。一〇月、体がますます痩せていき、前川の勧めで旭川赤十字病院に入院する。

・一九五二（昭和二七）年、綾子三〇歳、前川三二歳。

二月、脊椎カリエスの疑いが強まり、札幌医科大学附属病院（以下、札幌医大病院）に転院。三月、前川の依頼を受けた日本基督教会札幌北一条教会員西村久蔵（『愛の鬼才』の主人公）の見舞いを受ける。四月、体が一層痩せていく。五月末、脊椎カリエスと診断される。以後七年間ギプスベッドに病臥し、絶対安静を強いられる。七月五日、綾子、西村の導きで小野村林蔵牧師により病床受洗。一二月一七日、前川、肋骨切除胸郭成形手術（一回目の手術）。

百合子の訃報に嘆き悲しむ綾子に、前川は『十二年の手紙』（その一、その二）を続けて贈っている。また、西村に綾子の見舞いを依頼し、自身も変わらず手紙も送り続け、独り離れ住む綾子を懸命に支える。戦後、一切のものを信じることをやめ自殺まで図った綾子が、ついに受洗するに至る。その過程には、前川が、綾子のその時々の心の叫び声を聴き、それに応え導くかのように『十二年の手紙』を渡していたことが窺える。

・一九五三（昭和二八）年、綾子三一歳、前川三三歳。

七月一二日、西村急逝。一〇月、札幌医大病院をギプスベッドのまま退院。自宅療養に入る。一一月、前川が綾子を訪問。これが最後の訪問となる。その後まもなく前川の病状悪化。『十二年の手紙その三』の扉に、「祝クリスマス　綾ちゃん」と記し、綾子に贈る[23]。これが、前川から贈られた最後の本となる。

・一九五四（昭和二九）年、綾子三二歳。

五月二日、前川召天（享年三三）。綾子、悲しみが深く、一年間ほぼ人に会わずに過ごす。と同時に、前川の死の直後、綾子は二人の書簡集を出したいと思う（一九年後の一九七三年に実現し、『生命に刻まれし愛のかたみ』が新潮社から刊行）。

西村の急逝に続き、かけがえのない前川も去り、再び奈落の底に突き落とされた綾子の悲しみの深さは果てしなかっただろう。だが、綾子がこれからなすべきことを『きけわだつみのこえ』に託し、更に

は『十二年の手紙』に描かれた百合子の生き方をこれからの〈生〉の道標にしてほしいと願い、前川はこれを最期に手渡したのではないだろうか。そして、その想いが伝わったからこそ、悲嘆にくれながらも「二人の書簡集を出したい」と綾子は決意したのだと思われる。

この翌年、三浦光世と出逢った綾子は、一九五九（昭和三四）年に結婚する。一九六一（昭和三六）年、雑貨屋を開店し、二年後に『氷点』を書き始めるこの時期は、綾子の人生の新たな幕開けとも言えよう。だが、前川の死後に「出したい」と決意した二人の書簡集が、一九年の時を経て一九七三年に出版された。これは、前川から渡されたものを、綾子がこの間に想い温め続けていたことを物語っているのではなかろうか。その手がかりを、次章で探ってみたい。

二、三浦綾子作品にみる宮本百合子とその影響

一九五〇年に、宮本百合子の小説『道標』の連載が終了した。綾子は、そこに繰り返し出て来た「銃口」に、「非常に心ひかれた」と語っていたが、そこから一四年の時を経て[24]、自身も『氷点』で作家デビューする。以後書かれた作品において確認することのできる「宮本百合子」に関する言説、「きけわだつみのこえ」、「銃口」（という言葉）を、初出順（連載作品は、連載開始年で記す）に辿る。（なお小説・自伝小説には［小］、エッセイには［エ］、インタビューには［イ］、対談には［対］と付し、初出時のタイトルを「　」内に

記す。）

二―一、作家歴一～一〇年（一九六四～一九七三年）

・一九六五（昭和四〇）年、綾子四三歳。

奈緒実は、三日がかりで、戦没学生の手記「きけわだつみのこえ」と、原民喜（はらたみき）の「夏の花」を読み終えた。そこには、なまなまとした戦争の匂いがあった。戦争に押しひしがれた、いたましい命のうめきがあった。

（［小］「ひつじが丘」[25]）

・一九六六（昭和四一）年、綾子四四歳。

わたしの尊敬する夫婦像は、宮本顕治・百合子夫妻、（中略）顕治が思想犯として捕らわれ、以来、実に十二年の歳月を、ほとんど獄の内と外に離されて暮らした。この二人には、この世的（よ）な夫婦の条件は何もなかった。／夫は獄にいるわけだから、経済的な力はないのと同様である。同居もできず、自由に面会もできない。金網をへだてて、監視つきで話をするしかない。手紙も検閲される。／しかし、この夫婦の尊敬と信頼に満ちた愛情は、なんとすばらしいものだったろう。実に男らしくみごとな、九つ年下の夫と、賢く愛情ゆたかな妻との姿を、わたしは夫妻共著の『十二年の手紙』（筑摩書房）に見て、深い感動に打たれた。十六年前のことである。／（中略）／これこそ、最も重要な共通点だとわたしが思うのは、この三夫妻には、夫婦に共通の生きる目的があったということだ。／宮本夫妻は同じ思想によって生きていた。

（［エ］「性生活のない夫婦の愛情」[26]）

・一九六七（昭和四二）年、綾子四五歳。

① 彼（筆者注、前川正のこと）は、わたしを少しでも成長させることに、喜びを感じているようだった。ゲオルギューの「二十五時」、リルケの「マルテの手記」、宮本百合子・顕治の「十二年の手紙」など、次々に買ってきては、わたしに感想文を書かせるのだった。（[小]「道ありき―わが青春の記」(27)）

② 彼の影響もあって、わたしは本をつとめて多く読むようにした。「きけわだつみのこえ」もそのひとつである。（略）わたしはこの本を読み終えた時、この世には読み終えたということのできない本のあることを感じた。いかに感動して読んだからと言っても、それだけでは読んだことにはならないのだ。読んだ者の責任として、その後の生き方において、この本に応えなければならないという本もあるはずである。／この「きけわだつみのこえ」には、若い学徒たちの遺書や日記やノートが載っていた。／（中略）／いかに涙して、この「きけわだつみのこえ」を読んだとしても、戦争はまたくり返されることだろう。／（中略）／「きけわだつみのこえ」の学生たちが、若く清潔であればあるほど、わたしは戦争否定のために、どうしても必要な、神のことを考えずにはいられなかった。ともあれ、この本を読んだことは、わたしの信仰への生活に、大きな刺激となったことは確かである。

（[小]「道ありき―わが青春の記」(28)）

③ 「みどり、つけ上がるな」／ぴたりと銃口をつきつけたような、冷酷な声であった。

（[小]「積木の箱」(29)）

・一九六八（昭和四三）年、綾子四六歳。

私が素晴らしい夫婦だと思っているのは、宮本顕治・百合子夫妻、（略）相手は刑務所に入ってしまい生活力はゼロ。名誉も何も無い。年齢は百合子の方が九つ上です。この世的に考えるなら、とても耐えられることではないのですが、こういう状態の生活が十年間続き、素晴らしい夫婦愛が生れました。それは、顕治と百合子の生きる目的が同じだったからだと思います。（[エ]「恋愛と結婚（三）」[30]）

・一九六九（昭和四四）年、綾子四七歳。

① この療養の時期はわたしの最も本を読んだ時代である。宮本百合子、伊藤整、川端康成、太宰治、茂吉歌集をはじめ、三木清や、モンテーニュその他、いろいろと読んだ。

（[エ]「『パンセ』につよい感動」[31]）

② 今度、宮本百合子選集が刊行されることを聞き、私は宮本百合子の死を思いだした。（略）ちょうど『展望』に載った「道標」が終わった直後だったからだ。／私自身療養中であったというせいもあってか、私はその死を実に残念無念に思ったのである。／私は小説を書き始めてから、血漿板減少症となり、紫斑が体のあちこちに出るようになった。（略）尊敬する宮本百合子の病気と同じなのはありがたいが、肝腎かなめの小説が、似ても似つかぬものでは、まだ死ぬにも死ねないと苦笑している。／とにかく、百合子も顕治も、刑務所の高い塀などには、少しも距てられることなく、劣等感も持たず、伸々と自由に、堂々と生きていた。生きる目的を持った人間というものは、投獄されようが、夫と長い間別れていようが、その歩みに揺るぎのないことを私はこの夫婦から知らされた。／「十二

年の手紙」には、名作「道標」が生まれるのも道理と思わせる、確固たる人間顕治・百合子が生きていた。それから私は、さかのぼって「伸子」「風知草」「二つの庭」「播州平野」等々、吸い取るように読んで行き、あらためて心うたれたのであった。今、この選集の刊行を機に、現在の時点で、私はもう一度読み返してみたいと思っている。

（［エ］「『宮本百合子選集』に想う『道標』『十二年の手紙』のことなど」[32]）

・**一九七〇（昭和四五）年、綾子四八歳。**

「この赤レンガの建物、宮本百合子のおとうさんが建てたんですって？」　（［小］「続氷点」[33]）

・**一九七二（昭和四七）年、綾子五〇歳。**

当時の神風特攻隊の中には、十七歳の少年たちがいたと聞いている。神風特攻隊とは、爆弾を抱えて飛行機に乗って、単身敵の軍艦を求めて飛び立つ。飛び立ったが最後、彼らは永久に帰らない。なぜなら、爆弾を抱えて、飛行機もろとも敵艦に向って自爆するのが特攻隊の定めだったからである。

（［小］「石ころのうた」[34]）

・**一九七三（昭和四八）年、綾子五一歳。**

「十時ね、また西部劇ね」／スイッチを入れると、草木のない赤い山肌を、裸馬に乗った男が、あとをふりむいて銃口を向けた。

（［小］「足跡の消えた女」[35]）

この時期の言説にみる特徴の一つ目は、主にエッセイにおいて「宮本百合子」の名を挙げ、「尊敬する夫婦像」、「素晴らしい夫婦」と率直に讃えていることである。夫妻の「生きる目的を持った人間」の「歩みに揺るぎのないこと」に、結婚して間もない綾子が理想を重ねている様が浮かび上がってくる。

二つ目は、『ひつじが丘』の主人公に『きけわだつみのこえ』を読ませ、『続氷点』中のセリフに「宮本百合子のおとうさんが建てた」赤レンガ、などと実名や史実を作中にそのまま用い、リアリティを持たせている点である。

三つ目は、作家デビュー後まもなく、「銃口」という言葉を二つの小説で用いている点である。例えば、「銃口をつきつけたような、冷酷な声」は、「声」の形容として「銃口」を用いる不自然さが否めず、「裸馬に乗った男が、あとをふりむいて銃口を向けた」西部劇の場面は、小説の流れからやや唐突に出て来る印象をぬぐえない。「銃口」という単語のイメージや用い方に思いを巡らせながら、既に実験的に使用しているようにも思われる。

二―二、作家歴一一～二〇年（一九七四～一九八三年）

・一九八〇（昭和五五）年、綾子五八歳。

① ここにわたしは『きけわだつみのこえ』という本を持って来ています。ご存じのように、日本戦没学生の手記です。（[小]「青い棘」[36]）

② 今、私の机の上に、三冊の本がある。背表紙が手ずれしていて、私の、この本に対する愛着がそ

こに語られている。この本は、「十二年の手紙」その一、その二、その三である。（略）／宮本百合子は次のように書いている。／〈（略）／いかが？　私の手紙は。私の手紙には私の声が聞こえますか？　私のころころした恰好が髣髴いたしますか。（略）〉実に百合子の声も、顕治の声も、そしてその二人の姿も、心のこまやかなひだも、これを読む私たちの胸にはっきりと聞え、鮮かに見えてくるのである。（略）私は「十二年の手紙」こそは、宮本文学のすべての鍵がかくされている豊穣な土壌だと思う。百合子のどの小説を読んだとしても、「十二年の手紙」を読まなければ、それは本当に宮本百合子を読んだことにはならないような気がする。私自身はキリスト信者で、立場は全くちがうが、しかし百合子が真摯に生きた姿勢だけは、決して見失ってはならぬものだと思っている。

（［エ］「『十二年の手紙』と私」[37]）

③　図書館といっても、私の通っていた女学校にある小さな図書館で、それは冊数もまことにささやかであった。／（中略）／その中には中條百合子（ちゅうじょうゆりこ）の著書もあって、それが私の目にはひどく眩（まぶ）しく映ったものだ。後の宮本百合子であるこの中條百合子が、十代で世に認められたことを、国語の時間に聞いたことがあったからだ。

（［エ］「眠られぬ夜のために」　ヒルティ[38]）

・一九八一（昭和五六）年、綾子五九歳。

①このタンカイ堂から、私は「風と共に去りぬ」を買った覚えがある。（略）夏目漱石（なつめそうせき）や宮本百合子（みやもとゆりこ）のものも、目録の中にあったと記憶している。

（［エ］「枕草子」　清少納言[39]）

②　今、私の前に背表紙のぼろぼろになった本が一冊置かれてある。それがこの「きけわだつみのこえ」

である。／（中略）／こうした過去を持つ故に、自分の同年代の男たちの書いたこの「きけわだつみのこえ」は、私の心を揺り動かさずには置かなかったのである。／この本を読んだ私は何かをしなければならないと思った。が、何をすべきかがわからなかった。私にこの本をくれたのは、私をキリストに導いてくれた前川正であった。／（中略）／もし高学年を受け持っていたら『きけわだつみのこえ』は、私の胸を更に鋭く突き刺していたにちがいない。／（略）／この「きけわだつみのこえ」は、何を聞けと言っているのか。それは正しく、再び戦争を起してはならぬという叫びであり、戦争こそは自国を真の意味で亡ぼすものであるという叫びなのではないか。私たちが真に祖国を愛するなら、高い理想を抱きつつ、無惨にも戦火の中に散って行ったこの若い学徒たちの声に、永遠に耳を傾けつづけ、平和を叫びつづけるべきではないかと思うのである。

（[エ]「きけわだつみのこえ」(40)）

③しかもこの二人の手紙は、まことに豊かな内容と、美しい人間愛、夫婦愛に満ちたものである。更に言えば、人間としての誇りに満ちた美しい姿が、全編をつらぬいているとも言えよう。／（前略）顕治も百合子も、生きる目的が一つであったということであり、二人の結婚生活が茨の道であることを、充分承知していたということである。投獄も死も恐れず、同じ理想に生きたこの二人は、その理想を持ちつづける限り、官憲にも、時間にも、引き離されることはなかったのである。／思想への好き嫌いは別として、私はこの二人の生き方に深い敬意を表さずにはいられない。立場がちがっても、賞讃すべきものを私は賞讃せずにはいられないのだ。あの軍国主義時代、天皇を神とする時代にあって、天皇制反対、侵略戦争反対をとなえることが、どれほどの勇気を要するか、言って見

れば、銃口の前に飛び出すに等しいことであった。しかし二人は、それを人間の理性の声として従い、苦難を避けようとはしなかった。　（[エ]「十二年の手紙」宮本顕治、宮本百合子往復書簡[41]）

・一九八二（昭和五七）年、綾子六〇歳。

それは、宮本百合子の人間性に、その小説を通して心魅かれていたからだった。この度尾崎ふささんの講演記録を読み、私の感じ取っていた以上の宮本百合子像を知らされた。／（略）／さて百合子の誕生パーティの日のことである。幾人かの客の前で、尾崎さんは半熟の卵のべったりとついた皿をなめた。貧しい親から、皿は隅々までなめろと言われて育ったためである。（中略）とたんに百合子も自分の皿をぺろぺろなめ出した。／「今時卵なんて貴重品だから、もったいないよね」／（前略）何というあたたかさであろう。何という大きな心であろう。（中略）私はこの記録を読んで、胸が詰まった。許すということはこういうことなのだ、と初めて知った。この時百合子は、尾崎さんの不作法を咎めるよりも、何とかして救おうとした。（中略）／皿をなめる生活というものを、百合子は思いやることが出来たのだ。これが本当のゆるしである。　（[エ]「あやまちをゆるすのは人の誉である」[42]）

この時期の特徴の一つ目は、尾崎ふさのエピソードも加わり、綾子の宮本百合子観が一層深まっている点である。「『十二年の手紙』こそは、宮本文学の」「土壌」、「宮本百合子の人間性に、その小説を通して心魅かれていた」と、作品への言及も見られ、「人間」百合子への敬意から、百合子の「文学」へと視点が広がっている。また、『眠られぬ夜のために』や『枕草子』を綴った読書エッセイにまで、百合子に関

する記載が見受けられる。

二つ目は、やはりこの時期にも、小説の主人公に、「わたしは『きけわだつみのこえ』という本を持っています」と語らせていることである。かつて教え子たちに、「大きくなったらね、あなたがたも、み国のために死ぬのよ」[43]と語っていた自身の胸を同書が突き刺すものであり、だからこそ、戦火の中に散っていった学徒たちの声に永遠に耳を傾け続けるために、繰り返し語らせているように思われる。

三つ目は、「銃口」という語の用い方である。軍国主義時代に天皇制反対を唱えるのは「銃口の前に飛び出すに等しいこと」でもあり、投獄や死に至ることさえあった。それでも勇気ある顕治・百合子夫妻は異を唱えた。これは、「銃口」を向けられる側へとイメージを膨らませる用い方と言えよう。

二―三、作家歴二一～三〇年（一九八四～一九九三年）

・一九八六（昭和六一）年、綾子六四歳。

① 宮本百合子は、／「想像力とは愛である」／という言葉を残している。

（［エ］「間がぬけているのは、気が利き過ぎるよりもいい。」[44]）

② 日本戦没学生の手記『きけわだつみのこえ』を初めて手にとったのは、一九四九年の秋であったろうか。私はその時、肺結核を病んでいた。この本の贈り主も肺を病む医学生だった。私と同年代の、戦没した学生たちの手紙を、日記を、手記を、私はこの本を読みながら、あらゆる頁で涙を流した。さぞ生きていたかったであろう若い命を思って泣いた。（中略）／六十三歳の今日まで、あらゆる頁で嗚咽し、見返しの絵にさえ泣いたのは実にこの一冊であった。戦争の恐ろしさ、酷さを、こうま

で告発した本を私は知らない。

（[エ]「思い出の一冊『きけわだつみのこえ』」[45]）

・**一九八九（昭和六四・平成元）年、綾子六七歳。**

① 戦後、「きけわだつみの声」という本がベストセラーとなった。戦いに死んでいった人たちが、本当は何を言いたかったか、私たちは貪るように読んだものだ。好きな学問をつづけたかった、と切々と訴える遺書もあった。どんなに生きて学問をしたかったかと、若い私は涙をこぼした。「きけわだつみの声」に遺書を残した人たち、学業半ばに果てていった多くの学生たちが、もし無事に帰って来たとしたら、きっとあの丸善の、あるいは他の書店の店先に立って、／「ああ、帰り着いた」／と、胸の詰まる思いで、立ち尽くしたにちがいない。

（[エ]「私の中の丸善」[46]）

② ○月○日　／朝、床の中で、ふっと今度の連載小説の題名が浮かんだ。／「銃口」／という題である。担当者の眞杉氏が、激動の昭和を背景に、神と人間の問題を書いて欲しいと言われた。その昭和の一面を、この「銃口」は象徴してはいまいか。

（[エ]「生かされてある日々」[47]）

・**一九九一（平成三）年、綾子六九歳。「銃口」連載中。**

上流階級の百合子の家は、一流ホテルにも似た格式があった。（略）客たちの中に尾崎ふさという貧しい家の娘がいた。常々、皿は隅々までなめろと言われて彼女は育った。で、半熟卵のべったりとついた皿を、彼女はぺろぺろとなめた。客たちはハッとし、うつむいて声を発する者もいない。とその時、

百合子は尾崎ふさと同じように、自分の皿をぺろぺろとなめ、「今どき卵なんて貴重品だから、もったいないよね」と言ったのである。（中略）それは、人の非を咎めるよりも、人を許し、愛そうとする姿勢である。

（［エ］「森繁久彌夫人を思う」[48]）

・一九九三（平成五）年、綾子七一歳。「銃口」連載中（「本の窓」八月号で最終回）。

本はよく読みました。学徒出陣で戦死した学生たちの手記「きけわだつみのこえ」もその一つ。私は戦争中に自分が教えたことが正しかったのか、墨で塗りつぶした教科書の方が正しいのかが分からなかったけど、これを読んで戦争は間違っていたと確信しました。そして戦争を否定するためには決定的な何か、つまり神の存在が必要だと痛感したのです。（［エ］「肺結核で十三年間の闘病生活に」[49]）

『銃口』の執筆が開始されるこの時期の特徴の一つ目は、『きけわだつみのこえ』をエッセイで取り上げ、「さぞ生きていたかったであろう」と学徒たちの胸中に繰り返し想いを馳せ、「生きて学問をしたかった」「ああ、帰り着いた」と、発せられたであろう声を聴こうとしている点である。

二つ目は、「銃口」を、新連載のタイトルに使うことを思いついた日記抄の箇所である。『道標』に繰り返し出て来た「銃口」に「非常に心ひかれ」て読んでいた、あの療養時代からずっと温め続け、作家になった後にも、多用とまでは言えないものの、「銃口」という言葉を思慮深く自身の作品に用いては、この言葉から膨らむイメージを問い続けてきた果てに、新連載のテーマと合致したということになろう。

三つ目は、一九八二年に綴ったが、九年の歳月を経てもなお、書かずにはいられなかった尾崎ふさの

エピソードを、正に『銃口』連載中（一九九一）に再びしたためている点である。貧しい家の娘（尾崎）が皆の前で思わず皿をなめた行為をかばうべく、百合子も咄嗟になめた。この実話に表れた百合子に対する綾子の想いは、先に確認してきた「百合子のゆるぎない生き方」と併せて綾子が見ている、弱い立場の者への百合子の思いやりや愛の深さである。この百合子への共感は、『銃口』では、主人公竜太の家族や担任の坂部が中原芳子に温かく接する筋書きと繋がっているようにも思われる。一例を挙げれば、芳子が病気の父親の世話をし、納豆売りをしてから毎朝遅刻して小学校に通っていた場面である。

二―四、作家歴三一～三六年（一九九四～一九九九年）

・一九九四（平成六）年、綾子七二歳。単行本『銃口』上下巻刊行。

①三浦　私は『銃口』の中でこんなことを書いていたんです。（中略）そのとき日本人は手を縛られて、たくさんの朝鮮兵の銃口に囲まれながら、その人の前に据えられる。朝鮮の人は名前を聞いたときに恩人の息子だと分かって、日本人を助けるんです。　（[対]「生命・愛が問いかけるもの」[50]）

②〝昭和を書いてほしい〟ということで、タイトルを考えた時に、割とスッと出てきたのが『銃口』だったんです。（略）そして戦場で火を噴く銃口もあるけど、もちろん、それだけじゃない。実は、あなたにも私にも、銃口がいろんなところから向けられているんですよ。横から前からそして後ろから。目に見える形もあるし、見えない形もある。敵も味方もわからない、気味の悪さ……。厳しい思想統制化の戦時中に起こった「綴方教育連盟事件」はまさにそうなんですね。一生懸命に生きてきた人たちが、何の故もなくやられちゃったのですから。

（[イ]「戦場の恐怖よりも〝見えない銃口〟の恐怖を伝えたい」(51)）

③三浦　あの当時の日本の国は、どこを見ても『銃口』が国民を狙っていた（後略）戦争の時代の神は天皇ですから、この人のために死ぬと思わされて、何も知らずに素直に戦争に連れて行かされた。その時に、こっちへも向けられていたものが銃口だったんです。

（[対]「『銃口』―国民狙う時代の狂気」(52)）

・一九九五（平成七）年、綾子七三歳。

①三浦　私、宮本百合子（みやもとゆりこ）と顕治の『十二年の手紙』を読んで、じつに感心したのは、（後略）自分が刑務所に入っているあいだ、奥さんは外でいじめられながら、小説を書いて、そしてほとんど共に棲（す）んだことのない夫婦でいながら獄中の彼のために一生懸命やってあげるでしょ。それに対して、顕治から「すまない」という言葉は、ほとんど返ってきてないのね、手紙のなかでは。これは、自分たちが受けている苦しみがどこから来ているかということをしっかり把握（はあく）した、人生観のひとつになった夫婦だからできることで、こういう見事な亭主ぶりを発揮できる男というのは、私、すばらしいと思った。そこに、あなたもどこか似ているところがあるのよね。

（[対]「対談・結婚して三十六年 いま思うこと」(53)）

②紫斑病は宮本百合子（みやもとゆりこ）を死に至らしめた病気である。宮本百合子は私の好きな作家だった。いや、好きというより尊敬の念を抱いていた。前川正（まえかわただし）という幼馴染（おさなな）みが、療養中の私をよく見舞に来ては本を貸してくれた。その中に宮本顕治（けんじ）・百合子の「十二年の手紙」があった。（中略）／当時は共産党

員というだけで、死刑に処せられかねない時代である。そんな中で顕治は東京から網走刑務所に移される。それを聞いた百合子が、住み馴れた東京を離れて、寒さのきびしい網走に自ら移り住むことにした。／（中略）この一事にも、百合子の顕治に対する愛の高さと深さを感じないではいられないのだ。／そんなわけで私は療養中、百合子の小説をよく読んだ。そして、訪ねて来る前川正と、百合子の話をよくしたものだった。百合子は獄中の夫に心を遣いながら小説を書いていたのだ。が、私がその小説等を愛読している頃、百合子は突然死んだ。／（中略）／（これからの日本に、最も必要な人が死んだ）／そう思って私は泣いた。前川正も百合子の死を知って間もなく、私を見舞に来た。／（中略）／宮本百合子は大作を書いたあと、あっけないほどに早くこの世を去って行った。（中略）心の底で、（宮本百合子さえ死んだ紫斑病なら、まあ諦（あきら）めてもいいわ）という思いもあった。俗に言えば「あの方と同病で光栄です」と言うところか。／（中略）／（やはり宮本百合子と同じ病気になってしまった）／（中略）／「先生、わたしも宮本百合子のように紫斑病ではないでしょうね」

（［エ］「紫斑病の心配」[54]）

・一九九七（平成九）年、綾子七五歳。

① 前川さんの影響もあって、わたしは本をつとめて多く読むようになった。『きけわだつみの声』（ママ）もそのひとつ。（略）この世には読み終えたと言うことの出来ない本があることを感じた。如何に感動して読んでも、それだけでは読んだことにはならない。読んだ者の責任として、その後の生き方において、この本に応えなければならないという本もあるはずです。／（中略）／如何に涙して、『き

けわだつみの声』を読んだとしても、戦争はまた繰り返されるのではないか。／（中略）／『きけわだつみの声』の学生たちが若く清潔であればあるほど、わたしは戦争否定のために、どうしても必要な神のことを考えずにはいられません。

（[イ]「きけわだつみの声――戦争と平和」[55]）

②わたしは昨年出版した新しい小説『銃口』の中で戦前を舞台に軍隊や警察が持つ「銃口」が何時国民に向けられるか、という問題について書いたが、戦争が終わって五十年以上たつ現代でも同じだ、という実感を持っています。

（[イ]「永遠の平和を求めて――小説『銃口』の背景」[56]）

最晩年の一九九七年になってもなお、綾子が『きけわだつみのこえ』に言及していることには、着目せざるを得ない。「この世には読み終えたと言うことの出来ない本がある」、「その後の生き方において、この本に応えなければならない」という言葉は、一九六七年発表の『道ありき』に既に綴られているからである。以来、『きけわだつみのこえ』及び「戦争否定」と「神」を描き続け[57]、綾子はまさに「この本に応える生き方」をしてきた。だが、それにもかかわらず三〇年の時を経てもなお、同じ想いを述べるほどに、同書が綾子の作家人生、信仰生活の核となっていたことが窺える。

二つ目は、一九九五年のエッセイで宮本百合子について述べる際、そこに前川のことが一体化して綴られている点である。同様の記載は一九六七、及び八一年の引用にも見られるものの、このエッセイからは、綾子が百合子について前川と共に語り、「これからの日本に、最も必要な人が死んだ」時、やはり前川と共にその死を悼んでいた様子が浮かび上がってくる。

三つ目は、『銃口』の執筆を既に終えた一九九四年発表の、仏教思想家ひろさちやとの対談である。『銃

口』の中で「日本人（竜太）」が「たくさんの朝鮮兵の銃口に囲まれ」たが、敵であるはずのその「朝鮮人（金俊明）」により助けられた場面を、綾子はここで取り上げている。綾子は国境を越えて心は通じることを描いた。つまり、「世界」という視野で生命を尊んでいたと言えよう。

では、かつて療養中に綾子が読んでいた百合子の『道標』に繰り返し出て来た、かつ綾子が「心ひかれた」「銃口」は、どのように描写されていたのだろうか。次章では、『道標』における「銃口」描写について考察する。

三、『道標』における「銃口」描写

宮本百合子の自伝的小説『道標』は、綾子がまさに、生死の境を逡巡していた一九四七年一〇月から一九五〇年一二月にかけて「展望」に連載された。綾子はそれを、ただ『道標』を読むために人から借りていた。「毎号深く感動し、完結した時はあたかも自分が書き終えたかのような充足感すら味わった」、と後に記している[58]。

この小説には、女性解放の志向を持つ主人公佐々伸子が、人類史上初の社会主義社会への道を踏み出したばかりのソヴィエトに一九二七年末から三〇年秋まで滞在し、その民衆の生活を深く観察し信頼を寄せていく過程が描かれている。伸子は、第一次世界大戦の激戦地ヴェルダンを訪れ、

「フランスのために死せり」と記された兵士たちの墓標を見て、「フランスの誰のためだというのだろう？」と問いかける。さらに、苛烈な戦闘が行われたドゥモン要塞で、いらくさの蔭に「キラリと光って落ちているもの」を発見する。

1　震えが伸子の背筋を走った。それは、一つの銃口であった。地面にのぞいているその小さい一つ口は、そこに在った命を訴え、彼が生きていたことを訴え、だが今は死んで久しくなったことについて訴えている。伸子は、おもわずその金色の口を撫でた。金色の口は小さく、円く、あわれにかたかった。

伸子は、しばらくそこにかがんでいた。この金の口が光っているわけがわかった。ここへ来て、いらくさの間におちているこの一つの輪を見つけたとき、おそらく、どこの国の女でも、彼女が平民の女であるならば、思わずかがんでそれを撫でずにはいられないであろう。

（『道標』第三部第三章　二六〇―二六一頁）

この、物語終盤で初めて「銃口」が登場する。伸子を震撼させた「銃口」の正体は、戦闘中の爆撃で土の下に生き埋めにされた兵士が持っていた銃の筒口であった。その銃の「口」は、「小さい」「金色の」「円く」「光っている」とその有り様が視覚的に捉えられている。且つ、「撫でた」「かたかった」と触覚的にも描写されている。また、生を訴えている銃の口への惻隠の情[59]に、百合子が既に国境を越えた視野を持っていたことを確認できる。

二カ所目の「銃口」描写は、伸子がこの日を回想する以下の文章である。

2 晩秋のヴェルダンの日暮、ドゥモン要塞の霜枯れはじめた草むらの中に、落ちている小さな金の輪のように光っていた一つの銃口。その無言の小さな金の口が伸子に訴えた、そのような生の訴えが、常識のつりあいのこわれた芸術家のふるまいのうちにも疼いているように思われて、伸子は苦しいのだった。

（『道標』第三部第三章 三〇三頁）

銃口が、「小さな」とその大きさや、「金の」と色彩により視覚的に捉えられ、生を訴える口としてメタフォリカルに描写されている点は、一カ所目と共通している。また、「晩秋の」「日暮」と薄暗い景色で回想されることにより、「光っていた」口が一層際立たせられてもいる。だがここでは、「小さな金の輪のように」と直喩され、形容された「（一つの）銃口」の存在が、一層映像的に浮かび上がっている。

続く三カ所目の「銃口」描写においても、この直喩法は「銃口」を際立たせると同時に、「銃口」を形容する「嬰児の円くした唇」をも鮮烈に印象付ける。

3 嬰児の円くした唇のように西日をうけて光っていた小さな銃口。限りなく寂しい訴えをもっているその円い小さい金の輪は、伸子の瞳のまわりに、はまりこんで、もう伸子は、戦争という文字を、その金の輪をとおしてでなければ読むことができない者となった。

（『道標』第三部第四章 三六五頁）

ここで「銃口」は、戦争の象徴として明確に位置付けられている。ところで、一カ所目の本文に、「どこの国の女でも」とあったが、なぜ「女」とされているのか。この箇所にその理由が示唆されている。つまり、生き埋めにされた兵士が持つ銃の口に「嬰児」の「唇」を見る眼差しこそ、その生命を生み育んだ「母」のそれだからであろう。そしてこの日を機に、自分の為すべきことを見出した伸子は、母国へ帰ることを決意するのである。

続く四カ所目の「銃口」描写には、視覚・触角的描写と、直喩・隠喩表現の全てが用いられている。

4　おととしモスクワの赤い広場の、外国人のための観覧席で、行進を見ていたときの伸子は持っていなかった一つの小さい金の輪が、ことしは伸子の黒い瞳の底に沈んで光っている。それは一つの銃口であった。ヴェルダンの霜枯れそめたいら草のかげにすっかり埋められた口金のところだけを金色の小さい指環（ゆびわ）のように見せていて、あるおそい午後の西日に光り、思わず肩膝（かたひざ）をついてそこに指先をふれた伸子に、生きたい、とささやいて告げた銃口だった。

（『道標』第三部第四章三八九―三九〇頁）

二カ所目では「生の訴え」と描写されていた内容がここに至り、「銃口」から「生きたい、とささやいて告げた」声として、聴覚的にも描写される。こうして段階を経て伸子の五感に染みわたった「金の輪（銃口）」は、三カ所目では「伸子の瞳のまわりに、はまりこん」でいただけだったが、この四カ所目では「伸子の黒い瞳の底に沈」み、伸子と一体化する。

以上、『道標』における四つの「銃口」描写を挙げ、その特徴を確認した。序に挙げた碓田との対談で、綾子が「それを読んだとき、非常に心ひかれた」と語ったのは、伸子が聴いたこの兵士の「生きたい」という声なき声が、『きけわだつみのこえ』の読了後に綾子が聴いた「世界の若い魂の死際の声」と重なったからだろう。また、『きけわだつみのこえ』は、綾子に、『道標』の中の「銃口」が訴える声を聴こうとする意志を育んだ書である、とも言えよう。

この『きけわだつみのこえ』や『道標』を読んでいた時から約四〇年後に手掛けた『銃口』で、綾子はその題材に北海道綴方教育連盟事件を据えた。事件の被害者たちに取材を重ね、その無念の声を丹念に聴き、登場人物の声として作中に蘇らせ、『銃口』を書き上げていくのである。

四、『銃口』における「銃口」描写

次に、『銃口』における「銃口」描写を辿る。物語終盤の第三二章「逃避行」に六カ所、第三四章「羅津まで」に一カ所、そして第三五章「祖国の土（一）」に一カ所の計八カ所に確認できた。

一カ所目は、満州に侵入してきたソ連軍の進撃から逃れるために、脱走の罪に処せられてでも逃げることを決意し、それを一同に告げた山田曹長に対する次の場面である。

1　言い終るや否や、突如激怒した一人の古年兵が立ち上がった。

「山田曹長殿！　それが畏(おそ)れ多くも天皇陛下の軍人の言う言葉でありますか。場合によっては、自分が天に代って、曹長殿の命をもらう！」

古参兵は銃口を山田曹長に向けた。一同が息をのんだ。

（『銃口』下「逃避行」二一七頁）

「銃口」が敵からではなく、味方の日本兵から向けられたことがまず描かれ、皇軍に背を向けることが罪、とされた昭和の戦争の本質が強く印象付けられる。これこそが、黒古の言う「その銃口が誰によって誰に向けられているのか、三浦さんの深い思いがこめられたタイトル」を象徴する最初の場面と言えよう。

二カ所目は、竜太が夜の闇の中を先頭で歩きながら思いを巡らせる、次の場面で描かれる。

2　竜太は、きょう山田曹長に銃口を向けた古参兵の精悍(せいかん)な顔を思い出した。太い眉がきりりと上がって、

「命をもらう！」

と、山田曹長に向かって言った時、山田曹長の傍にいた竜太は、思わず恐れおののいて、あとずさりしたのだった。目の眩(くら)みそうな恐ろしさだった。爆撃機の襲来よりもずっと恐ろしかった。

（『銃口』下「逃避行」二二〇頁）

竜太の回想という形で、山田曹長が味方から「銃口」を向けられた場面が繰り返し描かれる。だが、

竜太の視線がここでは古参兵の表情にまで及んでいる。それは、山田の傍にいたことで、この時の竜太は、自身も銃口を向けられたも同然だったからである。銃口を向けられる恐怖は、我が身がその立場になってこそ、初めて真に知り得ることを訴えようとした作者の意図が浮かび上がる。

この想像を超えた思いは、「銃口」が描かれる三カ所目の次の場面でも描写されている。

3　竜太は山田曹長を敬愛していた。この人のためには、いざという時、代って死ねると思ったことが幾度かあった。そしてそれが自分の本心だと思っていた。山田曹長のためなら、敵の銃口の前に仁王立ちにさえなることも、可能のように思っていた。

だが古年兵が、獣めいた目で銃を構えた時、竜太は思わずあとずさりしてしまったのである。竜太は、自分がそんな人間に過ぎなかったのかと、情けなかった。

（『銃口』下「逃避行」二二〇―二二一頁）

ここで竜太が発見した想像を超えた思いの二カ所目は、「銃口」を向けられ死の恐怖を感じた時、山田への敬愛や自身の勇気が瞬時に砕かれた情けなさである。このように、竜太は実は何も見えていない人物として造型されているが、この時の竜太の恐怖が想定外の大きさだったのは、「敵」ならぬ「味方」から「銃口」を向けられたが故の恐ろしさがあったからかもしれない。

四カ所目に「銃口」が描かれるのは、竜太が夜明けに発見した、開拓団の集団自決の場面である。草原の中で銃を抱え死んでいた男、目隠しをされた子供と母親、老夫婦など総勢二十数人が銃で撃たれ死

んでいた。しばらくは誰も言葉が出なかったが、山田の言葉で死体を仰向けに臥せてやった。

4 恐怖に引きつった顔もあった。無表情に目を大きく開けている少年もいた。笑っているような女の子の、あどけない顔もあった。乳呑児も死んでいた。この一人々々に銃口を向けて、一人また一人と射殺し、最後に自分ののどもとを射抜いた男の気持はどんなであったろうと、竜太は思いやった。誰の胸も大きく血が滲(にじ)んでいた。自決は昨日、陽が沈んでからのことであったろうか。女児の傍らにオカッパ頭の日本人形がころがっているのを見た時、竜太は堪えられなくなって、声をしのばせて泣いた。

（『銃口』下「逃避行」二二三―二二四頁）

一カ所目、二カ所目の場合と同様に、ここでも「銃口」は日本人から日本人に向けられる。しかも、一家の長が自身の家族に向けるものとして描かれ、最後には自身にも向ける。綾子は「あとがき」の中で、「合田一道氏による『満州国開拓団27万人の逃避行』なる一文を見出し、作中に集団自決の一場面を挿入することができた」と典拠と共に言及している。綾子はこの集団自決の場面を描くに際し、誰が誰に「銃口」を向けたかを描くことで、この史実を印象付けようとしているように思われる。また、「逃避行」なる章題は、歴史の闇に埋もれた、兵士ではない一般民衆の凄惨な最期を想起させる役割も担っていると言えよう。

五カ所目に「銃口」が描かれるのは、八月一五日の朝の場面である。この時点で、竜太と山田は、共に敗走していた他の三人と袂を分かっていた。それは、食糧も水も尽き、鮮満国境に近付けない状況下

で、銃を捨て丸腰になることで敵から狙われることを避けようと提案した山田の言葉に耳を傾けたのが、竜太だけだったからである。

5 「なあ、北森。おれはたった今夢を見た。正夢か逆夢か知らないが、軍服姿のおれが、銃を持って、もう一人のおれに銃を向けた。銃口がおれのすぐ目の前にあった。あ、殺られる！　と思ったとき、その銃は小さな骨箱になった。謎めいた夢だと思わないか」　（『銃口』下「逃避行」二二七頁）

「軍服姿のおれ」は、銃を向ける日本兵山田であり、「もう一人のおれ」は、軍服も銃もまとわぬ丸腰の人間山田であろう。日本人が日本人に銃口を向けるこれまでの「銃口」描写の行きつく先として、銃を持つ者は、やがてはその銃口を向けられる側になること、そして、銃を持つ者はいずれは、気付かぬうちに「死」に辿り着く結末である、という綾子の想いを暗示するかのような場面である。

六カ所目に「銃口」が描かれるのは、朝鮮人抗日分子の目を掻い潜りながら朝鮮を目指し逃避行していた山田と竜太がついに取り囲まれる、「逃避行」の章の最終場面である。

6 「しまった！　感づかれたかな」

一隊がばらばらと、土塀の裏口から、竜太たちのいる斜面へと駆け上がって来た。驚くべき速さだった。思わず立ち上がった竜太と山田曹長に、ぴたりと銃口が向けられた。

（『銃口』下「逃避行」二二九頁）

ここで初めて、竜太自身が実在の銃口を向けられる。朝鮮人の抗日義勇軍が、日本兵に銃口を向けるという構図で、綾子は「銃口」を用いている。と同時に、竜太たちが日本兵だというだけで銃口を向けられる事実を読者に印象づける。ここまでの計六カ所の「銃口」描写をもって、「逃避行」の章が終わる。そのいずれの場面においても、向ける・向けられる「銃」そのものとして描かれていることが、特徴と言えよう。

七カ所目の「銃口」描写は、かつて日本で竜太の父に命を助けられた抗日義勇軍隊長の金俊明が、ソ連軍の本部に行き、竜太と山田を朝鮮から無事出航させるために、特別旅行許可証を発行してもらう交渉に命を懸けて出かけた際、それを心配しながら待つ、俊明の叔父金秋日の次のセリフに見られる。

7 「機雷は、われわれ焼玉エンジンで走る者たちには、恐ろしくも何ともないが、ソ連軍に脱出が見つかると、これは大変だ。いきなりぱくられる場合はいい。すぐさま銃口から火が噴くこともあるでしょう。そんな話をこのところ何度か聞いていますよ。それもこれも承知の上で、俊明は動いているんですが……」

（『銃口』下「羅津まで」二六二頁）

この場面で初めて「銃口」は、「敵（ソ連軍）」から向けられる物として描かれている。しかも、銃口が「敵」から向けられる物として描かれる唯一の場面であることに加え、これは金秋日の想像上の場面ゆえに、銃口から火は噴かれていない。

八カ所目の「銃口」描写は、『銃口』のほぼ最終場面である。ついに旭川に帰還した竜太が、出迎えた芳子と家路につく。巡査に呼び止められ、竜太が交番の中で荷物まで調べられた時、芳子が告げる。

8 「お巡りさん、北森質店をご存じでしょう。時々何かと交番には協力しているあの質屋さんよ。この人はそこの息子さんよ」

途端に巡査の態度が変った。何かを思い出すような感じで竜太の顔を窺(うかが)い、それから顎(あご)で行くように示した。

外に出た竜太は、まだ自分の背後に銃口が向けられているような、いやな気持だった。

(『銃口』下「祖国の土(一)」二八〇頁)

この一文で「祖国の土(一)」の章が結ばれている。瀕死の思いで辿り着いた祖国で竜太を待ち受けていたものは、「銃口を向けられているような、いやな気持ち」だった。戦争が終わってもなお、竜太は綴方教育連盟事件の被疑者として扱われ、忌まわしい記憶が晴れない。この描写は、『銃口』の最終場面と繋がるものであり、戦後と、更には昭和と地続きの現在を読者に印象付けようとする綾子の意図が表れていると言えよう。

以上、『銃口』における「銃口」描写を挙げ、その特徴を確認した。全八カ所中、実に四カ所もの場面で、日本人が日本人(味方)に、さらには自身の家族にまで向けた「銃口」が描かれていた。逆に、敵(ソ連軍)から「銃口」を向けられる場面は一カ所のみであり、しかも実景としては描かれず、あくまでも想像上

での描写にとどめられている。小田島本有[60]も『銃口』で描かれた「銃口」に着目し論をまとめているが、「銃口は実際のもの」であるとともに「比喩的な意味合いを帯びてくる」ものとして捉えている。

綾子が黒古との対談で、「銃口がいろんなところから向けられているんですよ」に続けて語った、「敵も味方もわからない、気味の悪さ」こそ、綾子が伝えようとした昭和の戦争の実相であろう。そしてそれを伝えるために、「銃口」を使い分けながら効果的に描写していったと思われる。

結

本研究は、宮本百合子と三浦綾子の接点を論証した、初の試みである。

まず、三浦綾子最後の長編小説『銃口』のタイトルが、宮本百合子最後の長編小説『道標』に描かれた「銃口」に由来していることを確認した。

そこで、綾子が百合子を知るいきさつを調査した。綾子は療養中に『道標』を読むために掲載誌「展望」を人から借りて読んでいた。だが、百合子の人間性と作品をより深く知っていくきっかけは、前川正から贈られた宮本顕治・百合子の書簡集『十二年の手紙』であった。その前年には、前川から『きけわだつみのこえ』も授けられていた。ついで、綾子の作品から「宮本百合子」「きけわだつみのこえ」「銃口」の記載を掘り起こした。すると、綾子は作家デビュー後から晩年までの約三〇年に渡り、これらを

自身の作品で繰り返し取り上げ続けていたことが明らかになった。百合子及び『きけわだつみのこえ』が、綾子の作品と生き方に大きな影響を与えていたのである。

次に、タイトル「銃口」に戻り、それが『道標』と『銃口』においてどのように描写されているかを分析した。その結果、百合子は「銃口」を、第一次世界大戦で生き埋めにされた兵士が持っていた「銃」の「(生を訴える)口」としてメタフォリカルに捉え、視覚的、触覚的、聴覚的に計四ヵ所で描写していた。一方綾子は、「銃口」をあくまでも「銃」そのものとして捉えつつも、実際にその銃口から火が噴く場面は、銃口描写計八ヵ所中一ヵ所、第二次世界大戦終結直後の満州における日本人の集団自決の場面のみであり、いずれもその銃口が誰から誰に向けられているのかを使い分けながら描写していた。

従って、両者の「銃口」描写には、差異を確認することができた。しかし、百合子も綾子も『きけわだつみのこえ』を重要視し[61]、民衆の叫び声を聴こうとする意志を持ち、共に、国境を越えた視野を得ていたという共通点が浮かび上がってきた。

なお、日本文学研究者のフィリップ・ガブリエルが、二〇二二年出版の論文集[62]の中で、「タイトル『銃口(muzzle)』は、『銃(rifle)』と『口(mouth)』という二つの漢字から成る」とした上で、「『声を抑圧する銃』に対し、『口』は『抑圧への抵抗から起こる人間の声』の象徴」と述べた。これは、綾子が『銃口』で描写した「銃口を向けるもの」と、百合子が『道標』で用いた「銃口」の描写法とが融合した捉え方と言えよう。ついで、「個人の声」を「抑圧する声」のあった時代を語る綾子自身の「声」を聴くことができる『銃口』は、内容と文体の一致が効果的な「声の文学」である、と論じた。本研究の結果は、この「声の文学」と繋がり得るものであろうか。その検証を、今後の課題としたい。

（はやし　かなえ・文学研究科日本文化専攻修士課程）

凡例

・底本として、『三浦綾子全集』（全二十巻、主婦の友社、一九九一年七月―一九九九三年二月）を使用した。ただし、同全集に収められていない作品からの引用は、註に記す通りである。

・宮本百合子『道標』第三部の引用は、『宮本百合子全集　第八巻』（新日本出版社、二〇〇二年五月）に拠った。

・三浦綾子『銃口』上下巻の引用は、小学館（一九九四年三月）に拠った。また、『銃口』の引用のみ章タイトルも明記した。

・各作品引用の際、改行箇所には／を付し、適宜傍線を施した。

・作品名を作品として記載する際は、雑誌掲載作品であっても『　』の表記に統一した。

・初出の副題等で現物を確認できなかったものは、監修 黒古一夫　著 岡野裕行『三浦綾子 書誌』（勉誠出版、二〇〇三年四月）に拠った。

・文芸評論家等の敬称は略した。

［註］

（1）三浦光世「十五『銃口』――綾子最後の小説」（『三浦綾子創作秘話』小学館文庫、二〇〇六年七月、二一一頁。）

（2）赤木国香「『銃口』韓国公演と光世さん」（監修 上出惠子 編集 小泉雅代、梶浦浩子、山田美穂『三浦綾子生誕一〇〇年＋α記念文学アルバム増補版』三浦綾子記念文学館、二〇二三年一二月、八八頁。）

（3）註（1）に同じ、二二五頁。

（4）『銃口』下「あとがき」三一四頁。この一文は、小学館「本の窓」編集長眞杉章からの三浦綾子宛書簡（一九八八月九月一二日発信、三浦綾子記念文学館所蔵）に由来するものであり、その書簡は二〇二〇年度の同館企画展 連載開始『銃口』三〇年／『青い棘』四〇年を記念した「アノ日、空ノ下デ君ハ何ヲ想フ」で展示されていた。同書簡には、「『氷点』にはじまる先生の『神』と『人間』という基本的なモチーフを軸として、混沌の二十世紀が、二十一世紀へ贈るメッセージとしていただきたいということです。／舞台背景は、激動と混沌の〝昭和〟という時代です。過去の何世紀分にも相当するこの昭和も、やがて暮れなずもうとしているいま、ここには二十世紀の文化と文明が、科学技術の進展と共にめまぐるしくせめぎあいつつ、人類を先の見えない袋小路へと追い込みつつあります。／この、先の見えない世紀末の先に、どんな人類の未来があるのか。私たち二十世紀を生きた人間は、二十一世紀を生きるいまはまだ若い次の世代に何を残し、何を手渡すことができるのか。／科学技術文明の行きつくところに、何があるのか。不条理な人間はそこに何を得、何を喪ってきたか。その時、『神』は何であるのか。／本当の『人間のドラマ』をお願いします。トルストイやドストエフスキーを超える、二十世紀末の、人間の金字塔を!!」／／一年間、熟成してください。連載開始は来年秋。」と記されている。なお、タイトルは当初、「黒い河の流れ」と構想されていたことが、三浦綾子『この病をも賜ものとして 生かされてある日々2』（日本基督教団出版局、一九九四年、二九頁）に記されている。

（5）黒古一夫との対談が、眞杉章の司会により一九九三年七月五日、旭川市の三浦綾子宅にて行われた。対談 黒古一夫・三浦綾子、司会 眞杉章「特別連載小説『銃口』を完結して」（「本の窓」九・一〇月合併号、小学館、一九九三年一〇月一日、七五頁。）本稿では単行本『希望、明日へ 三浦綾子対談集』北海道新聞社、一九九五年二月所収を使用、一二一―一四一頁。この段落の引用はすべて上記からのものである。

(6) 碓田のぼるとの対談が、一九九四年四月二八日、旭川市の三浦綾子宅にて行われた。「私と生徒たちとの個性的な出会い 三浦綾子さん『銃口』を語る」(「エデュカス」第五号、大月書店、一九九四年七月、八―二一頁)。本稿では『希望、明日へ 三浦綾子対談集』(北海道新聞社、一九九五年二月、一五三―一八三頁。)を使用し、この段落の引用はすべて上記からのものである。なお、本対談は『三浦綾子対話集1 人と自然』(旬報社、一九九九年二月、一九〇―一九一頁)にも再録されている。

(7) 初出、「私の出会った本」「十二年の手紙」 宮本顕治、宮本百合子往復書簡」(「主婦の友」一一月号、主婦の友社、一九八一年一一月一日。)本稿では、三浦綾子「わが青春に出会った本」(『三浦綾子全集 第十八巻』)註(15)同書を使用、九七―九九頁。三浦綾子「書簡集『十二年の手紙』=宮本顕治・百合子」(『わが青春に出会った本』新潮文庫、一九九〇年七月、二三九頁)にも再録されている。

(8) 佐藤将寛『三浦綾子 最後の小説「銃口」を読む―綴方事件とそのモデルたち―』柏艪舎、二〇〇六年八月、一二四―一二九頁。

(9) 上出惠子「三浦文学のゆくえ―三浦綾子『銃口』再考―」(森下辰衛、遠藤優子、日吉成人編『三浦綾子読書会紀要 綾果』三号、三浦綾子読書会、二〇二四年二月、五四頁。)なお、本稿では『三浦綾子研究』の著者名「上出恵子」を用いる。

(10) 三浦綾子「『宮本百合子選集』に想う『道標』『十二年の手紙』のことなど」(「読書の友」日本共産党中央委員会、一九六九年四月七日)に、「私が宮本百合子のことを知ったのは、女学校の頃、中条百合子の『貧しき人々の群』によってであった。しかしそれは、ただ天才少女の文壇へのデビューというエピソードに心を奪われただけで、本当に宮本百合子を読む気になったのは、昭和二十五年十月、リーベから『十二年の手紙』をもらった時以来である。」と記されていることに拠る。

(11) 三浦綾子年譜 三浦綾子記念文学館編『生きること ゆるすこと 三浦綾子 新文学アルバム』北海道新聞社、二〇〇七年六月、一一七頁―一二五頁。

(12) 自作年譜 監修 上出惠子 編集 三浦綾子記念文化財団『三浦綾子生誕一〇〇年記念文学アルバム』三浦綾子記念文学館、二〇二二年一〇月、一一〇―一二一頁。本稿では、監修 上出惠子 編集 小泉雅代、梶浦浩子、山田美穂『三

浦綾子生誕一〇〇年＋α記念文学アルバム増補版』三浦綾子記念文学館、二〇一三年一二月所収を使用、一一〇―一二一頁。

(13) 三浦綾子「道ありき」(『三浦綾子全集　第三巻』)

(14) 三浦綾子『生命に刻まれし愛のかたみ』新潮文庫、一九八〇年八月。

(15) 三浦綾子「わが青春に出会った本」(『三浦綾子全集　第十八巻』)

(16) 註(15)同書の一八二―一八三頁には、前川が扉に書いた次の全文と、その後には、当時の前川の心境を想う綾子の言葉も記されている。「〈これは全く私たちと同じ世代の友だちの声、しかも彼らは死に、私たちは生きた、私たちの生は、彼らに負っている。／さあ、更めて、／かつての自分たちの声を聞こう。／一九四九年十月二十六日〉／彼は結核患者の故に、戦争に赴かなかった一人であった。恐らく彼は私以上に、自分の生を彼らに負っていると思ったのではないか。」

(17) 註(14)同書、一九八頁。

(18) A説は、「一九五〇(昭和二五)年一〇月」に贈った、とする説。これは註(10)同紙の、「昭和二十五年十月、リーベから『十二年の手紙』をもらった」に拠る。また、註(13)同書の、一九五〇(昭和二五)年の内容と思しき五八頁にも、「彼は、(略)宮本百合子・顕治の『十二年の手紙』など、次々に買ってきては、わたしに感想文を書かせるのだった」という記載が確認できる。一方、B説は、「一九五一(昭和二六)年二月二七日」に『十二年の手紙その一』を、「(同年)四月三十日」に『その二』を、「一九五三(昭和二八)年」クリスマスに『その三』を贈った、とする説。これは註(37)に拠る。本稿では、A、B両説に基づき記載した。

(19) 註(10)同紙。以下引用する。――そして私は、生れて初めて作家に対して手紙を書いた。といっても、甚だ簡単な手紙だった。「深い感動を持って、『道標』を読み終りました。どうか、くれぐれもお体を大切になさってください。次回の作品に期待しております。」(ただし、「作家に手紙を出すというのは何か気恥ずかしく、私はためらいを感じて、その手紙を机の引出にしまったままにしてあった」とある。)

(20) 註(13)同書、六三頁。

(21) 註(10)の出典に同じ。「二十六年一月宮本百合子の死をラジオで聞いた時、私は思わず泣いた」、「今に至るまで、

有名人の死を聞いて泣いたのは、ガンジーの時と、宮本百合子の時だけである」に拠る。

(22) 註（18）、B説に同じ。

(23) 註（18）、B説に同じ。

(24) ここでは、朝日新聞朝刊に連載が開始された一九六四年一二月九日を「デビュー」としている。

(25) 初出、「主婦の友」一九六五年八月号―一九六六年一二月号、主婦の友社。本稿では『三浦綾子全集　第一巻』所収の「ひつじが丘」を使用、三六八頁。

(26) 初出、「週刊女性自身」光文社、一九六六年五月二三日。本稿では『三浦綾子全集　第十五巻』所収の「愛すること信ずること」を使用、五八―五九頁。

(27) 初出、「主婦の友」一九六七年一月号―一九六八年一二月号、主婦の友社。本稿では『三浦綾子全集　第三巻』所収の「道ありき」を使用、五八頁。

(28) 初出、註（27）の初出に同じ。本稿では『三浦綾子全集　第三巻』所収の「道ありき」を使用、六四―六六頁。

(29) 初出、「朝日新聞夕刊」朝日新聞社、一九六七年四月二四日―一九六八年五月一八日。本稿では『三浦綾子全集　第二巻』所収の「積木の箱」を使用、五一四頁。

(30) 初出、「婦人手帖」一一月号、七一号、札幌婦人会館、一九六八年一一月。本稿では『一日の苦労は、その日だけで十分です』（小学館、二〇一八年四月）を使用、九九―一〇一頁。

(31) 初出、「北海道新聞夕刊」北海道新聞社、一九六九年三月一四日。本稿では『ひかりと愛といのち』（岩波書店、一九九八年一二月）を使用、九〇―九三頁。

(32) 初出、註（10）同紙。

(33) 初出、「朝日新聞朝刊」朝日新聞社、一九七〇年五月一二日―一九七一年五月一〇日。本稿では『三浦綾子全集　第四巻』所収の「続氷点」を使用、一八六頁。

(34) 初出、「短歌」角川書店、一九七二年四月―一九七三年八月。本稿では『三浦綾子全集　第五巻』所収の「石ころのうた」を使用、四〇五頁。

(35) 初出、「小説宝石」光文社、一九七三年五月、五月号。本稿では『三浦綾子全集　第六巻』所収の「足跡の消えた

女」を使用、五二〇頁。

(36) 初出、「ベルママン」学習研究社、一九八〇年一月―一九八二年二月。本稿では『三浦綾子全集　第十一巻』所収の「青い棘」を使用、八七頁。

(37) 初出、「(月報一三)『十二年の手紙』と私」(『宮本百合子全集 第二十一巻』新日本出版社、一九八〇年三月、一―三頁。)

(38) 初出、「(私の出会った本)「眠られぬ夜のために」　ヒルティ」(「主婦の友」一一月号、主婦の友社、一九八〇年一一月一日。)本稿では註(15)同書を使用、三〇頁。

(39) 初出、「(私の出会った本)「枕草子」　清少納言」(「主婦の友」二月号、主婦の友社、一九八一年二月一日。)本稿では註(15)同書を使用、四七頁。

(40) 初出、「(私の出会った本)「きけわだつみのこえ」」(「主婦の友」七月号、主婦の友社、一九八一年七月一日。)本稿では註(15)同書を使用、七四―七九頁。

(41) 初出、「(私の出会った本)「十二年の手紙」　宮本顕治、宮本百合子往復書簡」(「主婦の友」一一月号、主婦の友社、一九八一年一一月一日。)本稿では註(15)同書を使用、九七―九九頁。

(42) 初出、「(泉への招待)あやまちをゆるすのは人の誉である」(「淡交」九月号、淡交社、一九八二年九月一日。)本稿では『三浦綾子全集　第十八巻』所収の「泉への招待」を使用、二六一―二六二頁。

(43) 註(34)同書。本稿では『三浦綾子全集　第五巻』所収の「石ころのうた」を使用、四〇五頁。

(44) 初出、「マミイ」付録冊子「MAMMY」小学館、一九八六年五月一日、四六―四七頁。本稿では『三浦綾子全集　第十九巻』所収の「私の赤い手帖から」を使用、三〇九頁。

(45) 初出、「北海道新聞日曜版」北海道新聞社、一九八六年五月四日。本稿では『国を愛する心』(小学館新書、二〇一六年四月)を使用、五四頁。新書収録にあたりタイトル変更あり。

(46) 初出、「私の中の丸善」(「学鐙」一〇月五日号、丸善、一九八九年一〇月五日。)本稿では『三浦綾子全集　第二十巻』所収の「心のある家」を使用、三六二頁。

(47) 初出、「(生かされてある日々)」(「信徒の友」一月号、日本基督教団出版局、一九八九年一月一日。)本稿では『この病をも賜ものとして 生かされてある日々2』(日本基督教壇出版局、一九九四年一〇月)を使用、三〇頁。

(48) 初出、「〔リレーエッセイ〕森繁久彌夫人を思う」(「北海道新聞日曜版」北海道新聞社、一九九一年一二月八日。本稿では『小さな一歩から』(講談社文庫、一九九七年一一月)を使用、一七頁。

(49) 初出、「〔私の中の歴史 生と死をみつめて〕肺結核で十三年間の闘病生活に」(「北海道新聞夕刊」北海道新聞社、一九九三年一月一一日。)本稿では、道新旭川政経文化懇話会編『綾子・大雪に抱かれて―三浦文学案内』(北海道新聞社、一九九八年六月)を使用、六六頁。

(50) 初出、『三浦綾子VS.ひろさちや対談集 生命との対話 キリスト教・祈りのかたち』主婦の友社、一九九四年二月、一五一―一五二頁。なお、本対談は『三浦綾子対話集2 愛と祈り』(旬報社、一九九九年一月)一八一―一八二頁にも収録されている。

(51) 初出、「〔書想インタビュー〕戦場の恐怖よりも〝見えない銃口〟の恐怖を伝えたい」(「SAPIO」小学館、一九九四年六月二三日、六二頁。)

(52) 初出、「〔対談 三浦綾子 山田洋次 希望 明日へ2〕『銃口』―国民狙う時代の狂気」(「北海道新聞朝刊」北海道新聞社、一九九四年八月八日。)本稿では註(5)同書を使用、一九一―一九二頁。

(53) 初出、「対談・結婚して三十六年 いま思うこと」(『新しき鍵―私の幸福論―』光文社、一九九五年五月三〇日。)本稿では『新しき鍵 結婚について考える』(光文社文庫、一九九六年一〇月)所収の同対談を使用、二〇九頁。なお、本対談は『三浦綾子対話集4 共に歩む』(旬報社、一九九九年四月)九九頁にも収録されている。

(54) 初出、「〔命ある限り〕紫斑病の心配」(「野性時代」六月号、角川書店、一九九五年六月一日。)本稿では『命ある限り』(角川文庫、一九九九年六月)を使用、一一一―一一四、一二五、一二八頁。

(55) 初出、「「きけわだつみの声(ママ)」――戦争と平和」(『さまざまな愛のかたち』ほるぷ出版、一九九七年一一月)六九―七三頁。なお、『信仰エッセイ選 平凡な日常を切り捨てずに深く大切に生きること』(いのちのことば社〈フォレストブックス〉、二〇二二年一一月)一五五、一五七頁にも再録。

(56) 初出、「永遠の平和を求めて――小説『銃口』の背景」註(55)の初出に同じ、一三二頁。

(57) 竹林一志「三浦綾子文学と戦争――戦争の描かれ方の変遷を中心として」(「キリスト教文学研究」第四十一号、日本キリスト教文学会、二〇二四年五月一一日)九八―一一三頁参照。

(58) 註（10）同紙。

(59) 宮本百合子「金色の口」（随想）の「生きながらの姿で埋められた一人の兵卒の銃口が叢が茂った幾星霜の今日もなお現れていて、それを眺めた人々は思わずも惻隱の情をうごかされ、恐らくはそこに膝をついて、その銃口を撫でてやるのであろう。」に拠る。初出、「（文壇曲射砲）読売新聞」一九三七年九月二三日。本稿では『宮本百合子全集　第十七巻』新日本出版社、一九八一年を使用、四八七頁。

(60) 小田島本有『三浦綾子論　―その現代的意義―』柏艪舎、二〇二二年四月、二七二―二七三頁。

(61) 宮本百合子の『きけわだつみのこえ』についての言及は、例えば次の記録で確認できる。

① 「小さい婦人たちの発言について――『わたしたちも歌える』まえがき――」（一九四九）の中の、「わたしたちがきょう青年の記録として、『きけわだつみのこえ』と『生き残った青年達の記録』をもち、更にこういう『わたしたちも歌える』をもつことのうちに、胸のひきしめられるものがある。」（『宮本百合子全集　第十七巻』新日本出版社、一九八一年三月、七七八頁。）

② 「『未亡人の手記』選後評」（一九五〇）の中の、「『きけわだつみのこえ』に『読みとりかた』がつけられていて、はじめて現代生活の意味がいきているということは、この文集とも無関係ではないと思います。」（『宮本百合子全集　第十七巻』新日本出版社、一九八一年三月、七九一頁。）

③ 「東大での話の原稿」（一九五〇年一二月八日、東京大学の戦没学生記念集会での講演メモ）の中の、「（獅子文六の「きけわだつみのこえ」が喜劇的になって来る、という言に対し、）わたしには　どうして　きけわだつみが喜劇になるのかわからない。それは獅子文六という方は喜劇を経験したでしょう」（『宮本百合子全集　第二十巻』新日本出版社、二〇〇二年七月、七四〇頁。）

④ 「ことの真実」（一九五一）の中の、「東大協同組合出版部から、『きけわだつみのこえ』という戦没学生の手記を集めた本が発行された。戦没した学生たちは、帝国主義の侵略戦争がどんなに人類的な犯罪であるかということを、死の訴えとしてのこした。やがて屍となる自分の靴の底へかくした紙きれの文字によって。ポケットの手帖にかかれた瀕死の自画像によって。」（『宮本百合子全集　第十三巻』新日本出版社、一九七九年一一月、五三六頁。）

また、東京大学での百合子最後の講演（一九五〇年一二月八日）については、次の記載がある。

⑤生方たつゑ「弾圧の中で昇華した抵抗文学 宮本百合子」の中の、「折しも東京大学で『わだつみ像』建立拒否抗議集会の戦没学生慰霊祭に病をおして出席して講演を行った」（解説 木下和夫『十二支別・易学解説 女性芸術家の人生12［亥年編］』集英社、一九八〇年六月、七五頁。）

⑥辻井喬「戦後の百合子―回想をまじえて」の中の、「『きけわだつみの会』、現在の共産党学生支部、反戦学生同盟などいくつかの団体が集まり、集会の準備をしました。（中略）宮本先生は『少し前から風邪をひいてなかなか抜けなくて調子がよくないが、学生さんが頑張っているのなら行かなければならないわね』と言ってくださり、引き受けてくださいました。」「百合子さんが学生の集会なのにメモまで作って話の準備をしてくれたことを改めて認識しました。風邪で具合が悪かったのにすまなかったなあという思いもしています。」（伊豆利彦［ほか］著、多喜二・百合子研究会編『いまに生きる宮本百合子』新日本出版社、二〇〇四年九月、一五七―一五八頁。）

（62）Philip, Gabriel. *Miura Ayako and the Human Face of Faith : Handbook of Japanese Christian Writers*. Edited by Mark Williams, Van C. Gessel and Yamane Michihiro. Japan Documents, 2022.p207-231.

『銃口』に関する記述、*Muzzle*（*Juko*）*:The Final Novel* は、二二四―二二九頁等にある。また、本稿での引用は、次の箇所（二二七頁）に拠る。— the Japanese title, Jūkō, comprises two Chinese characters, meaning “rifle” and “mouth” respectively, thereby representing an opposed pair, with the rifle seen as suppressing voice, the human voice rising in opposition to this suppression.